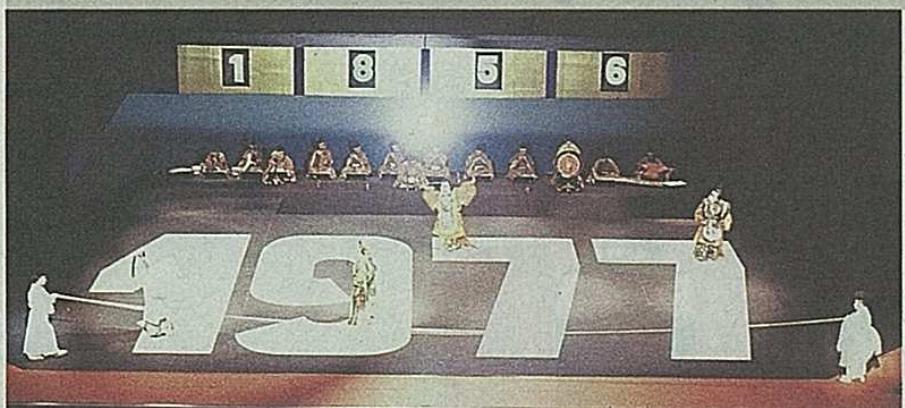


シュトックハウゼン、雅楽のため作曲



1977年、東京・国立劇場で初演された「歴年」
年」=杵島隆氏撮影

幻の名作「歴年」解禁

21日開幕する現代音楽

の祭典「サマーフェスティバル2014」(サントリ

ー芸術財団主催)で、20世紀を代表する作曲家シュト

ックハウゼン(1928~2007)が雅楽のために書いた「歴年」が上演され

る。77年、東京・国立劇場で初演。あまりの前衛性ゆえ評論家や学者に葬り去られたが、近年は若い世代から再演を求める声が相次いでいた。「幻の名作」の封印が37年ぶりに解かれる。

「歴年」は国立劇場開場10年に向け、日本の伝統文化に傾倒していたシュトックハウゼンに、プロデューサーの木戸敏郎が委嘱した。舞台には1977という四

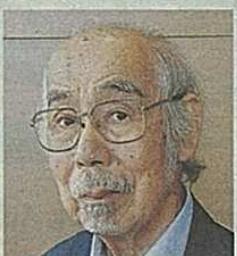
前衛すぎて敬遠…東京で37年ぶり

ちこめるなか、4人の舞人が楽譜の指示通りに歩む。シュトックハウゼンが提案したのは、楽器それぞれの音の情報量を視覚化する方法だ。たとえば琵琶や琴の音は、はじいた途端に減衰していく。竜笛は割と簡単に鳴るが、箏篋は強い息の力を要するため長くは鳴らせない。そんな音の持続のあり方で楽器を四つのグループに分け、舞台上の四つの数字に配置した。

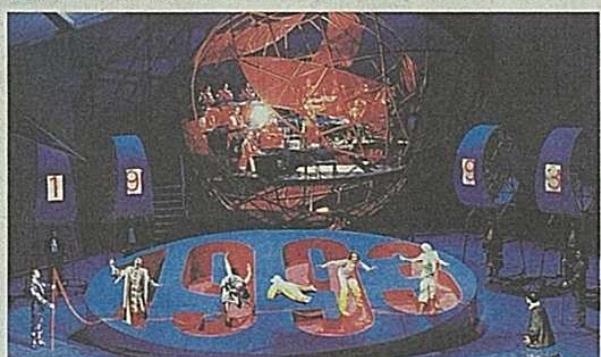
「歴年」はしかし、音楽界にスキャンダルを巻き起こした。著名な音楽評論家たちから「不毛」「退廃」と断じられ、「一度と上演」するべからず」と烙印を押す。舞台には1977という四

人の舞人が楽譜の指示通りに歩む。シュトックハウゼンが提案したのは、楽器それぞれの音の情報量を視覚化する方法だ。たとえば琵琶や琴の音は、はじいた途端に減衰していく。竜笛は割と簡単に鳴るが、箏篋は強い息の力を要するため長くは鳴らせない。そんな音の持続のあり方で楽器を四つのグループに分け、舞台上の四つの数字に配置した。

その一方、「歴年」は作曲者自身に大きな転機もたらした。七つの曜日を基調とする29時間のオペラ調とする「リヒト(光)」創作の源となつたのだ。「リヒト」



木戸敏郎



1993年に独ライブチヒで上演された「リヒト」。地球を模した装置やダンサーの動きを加え、新しいスペクタクルへと生まれ変わらせた
©シュトックハウゼン財団

「東京の夏」音楽祭で、日本でも「リヒト」の一部が熱烈なスタンディングオベーションを受けた。

今回のフェスの総合プロデューサーを務める木戸はこう語る。「時代に応じて形を変え、核となる精神を継ぎ、新たな創造の種となる。そうした伝統のあるべき姿を『歴年』が37年かけ、私に教えてくれた」

「歴年」雅楽版は37年後7時。「リヒト」の一部となつた「歴年」(洋楽版)は30日午後6時。演出は木戸と佐藤信。財団(03-3582-1355)。